

## 仙台教会のDNA・大沼上牧師就任 1957

### はじめに

DNA（デオキシリボ核酸）とは、生物の遺伝情報を記録する物質です。このDNAにより、生物の姿形や体質などを決定する情報が、親から子へ、更にそのまた子の世代へと引き継がれていきます。その結果、世代を越えて同じ形質が維持されていくことになるわけです。

比喩的に言えば、仙台教会にも固有のDNAがあるのでしょうか。教会は仙台にたくさんありますが、それぞれの教会は違いや特徴を持っています。私たちの教会では当たり前になっていることも、他の教会からは新鮮に見えたり、特殊に見えたり、変わっていると感じられたりすることもきっとあるのでしょうか。70年の歴史の中で自然に形成され受け継がれてきた、仙台教会固有のDNAのなせる業といったところでしょうか。

### 1. 大沼上牧師の就任と人物像

第2代牧師関谷定夫先生は、1957年（昭和32）3月<sup>1</sup>をもって仙台教会の牧師を辞し、再び学究の道<sup>2</sup>に進むこととなります。ご本人から湧き上がったたつての願いだったのか、あるいは西南学院からの強い要請があったためなのかは不明ですが、仙台での働きはまだ3年足らずであり、やっこの地にも慣れ、教会員たちとの絆も深まり、青年たちからは敬愛の的<sup>3</sup>とされ、また帰国休暇明けのグラント宣教師との協働も、ようやく軌道に乗ってきた時期であったはずですが、もちろん教会員たちの戸惑いは大きかったと思われます。そのような状況を一番よく把握されていた関谷牧師は、ご自身の辞任により大きな混乱が極力生じないよう、牧師として様々な配慮を事前に十分に行ったことでしょう。

関谷牧師の牧会的配慮の一つは、西南学院とのコネクションを有効に用い、後任人事を事前に時間をかけて準備したことです。前年に夏期奉仕神学生として大沼上神学生を仙台教会に迎えていることから、そのことは推測できます<sup>4</sup>。そのお陰で空白期間無しでスムーズに牧師の代替わりが行われ、1957年（昭和32）4月に大沼上牧師<sup>5</sup>が仙台教会の第3代牧師として就任することとなります。ちなみに、後に大

沼師からバトンを受け継ぎ第 4 代目の牧師となる天野五郎先生は、この年、福島での開拓伝道に着手されています<sup>6</sup>。

さて、大沼牧師はどんな方だったのでしょうか。その人物像について詳細にまとめて記したものはありませんが、いくつかの資料の中に師の人となりの一端を見出すことができます。

大沼牧師は「1924 年（大正 13）12 月 3 日山形県新庄に生まれ」<sup>7</sup>ました。「元日本軍の兵士で、戦争終結時に広島に駐屯」<sup>8</sup>していましたが、「幸運なことに、彼の部隊は七万人以上の生命を奪い、戦争を終結させることになった原爆の被爆地から離れていた」<sup>9</sup>とのことです。大沼師が戦時中の体験をグラント宣教師に語る時、「降伏前の最後の数カ月、常に飢えていたことを毎回のよう」<sup>10</sup>話していました。兵士の多くは根っこや木の皮を食べ、飢えをしのごうとしていました。それだけ食糧不足は深刻で、兵士たちは飢えの中で極限の状態にあったのです。

20 才前後の時期に兵士として味わった過酷な体験は、大沼青年の価値観や人生観に、決定的な影響を与えたことでしょう。入信と献身の詳しい経緯はよく分かりませんが、戦後、大沼青年は神学校に入り、牧師となるための教育と訓練を受けることとなります。そして 1957 年（昭和 32）3 月に「西南学院大学文学部神学科・専攻科」<sup>11</sup>を修了し、その後すぐに、ご夫人玲子さん<sup>12</sup>と共に新任の地・仙台に向かいました。仙台教会の牧師に着任した時 32 才で、少し遅めの牧師デビューでした。

『献堂 10 周年記念文集』（復刻版）の中で、編集子はこう語っています。「ヌーボーとした厳しい信仰を秘められた大沼牧師が夫人と共に来仙され、師のいくつかの実験的な牧会指導が始められた」<sup>13</sup>。また同じ文集で、ある教会員は大沼牧師について次のように語っています。「その御働きを一言で申せば『主にある正しき農夫』であったと云えましょう。自らは新しき畑を耕し、良き種をまき、古き畑よりは迷いの芽を摘み、雑草を抜き、さまたげの枝をはらい、つまづきの石を取り捨てました。そして、常に曇りなき太陽の光を畑の土に導かれました。ために、弱い芽や伸び過ぎの枝には耐え得ない厳しさを覚えたことありましょう」<sup>14</sup>。また、仙台教会出身の大槻国彦牧師は、自らの按手礼拝で行った説教の中で、大沼牧師についてこう語ります。「大沼先生はやや厳しい牧師で、私たちのだらしない気ままな教会生活を注意する説教を語りました。牧師が厳しかったため、ある教会員は教会を離れました。しかし、教会員として、信仰生活にしっかりとした訓練と鍛錬を受けていたため、

これは私にとって良いことでした」<sup>15</sup>。

また、大沼牧師ご自身が仙台教会献堂 10 周年の記念文集に寄せてくださった文章の中にも、その人柄や信仰、信念がにじみ出ています。「ひとつ残念に思うことは、あの会堂が実に素晴らしい会堂であるにもかかわらず、まるっきりのアメリカ式であることである。・・・アメリカ式はアメリカ式としての、たしかに立派な信仰告白的会堂形式を具現している。だがそれは、アメリカの信仰告白の日本への主張であって、日本人のわれわれの、ここと、そこでの告白の具現とはいいい難かった」<sup>16</sup>。また、献堂 40 周年記念に寄せての文章では、資本主義経済の発展の様態と尺度を、そのまま御業の進展の様態と尺度として無自覚に流されていくことへの危惧を述べた後、こう続けています。「右記の憂いは、戦前のわが教会が天皇制軍国主義に、ほとんど無自覚的に埋没して行ったのと一脈通じる。一脈と言ったのは、一脈に過ぎないのであって、今日、教会を盲目にしようとしている人間生存の現実は、それとは比較することの出来ない根深さと広範な領域を持っているからである」<sup>17</sup>。

## 2. 仙台教会の DNA として

上記のそれぞれの発言を聞くと、確かに厳しい牧会者であったとの印象を受けます。遅咲きの新米牧師としての気負いもあったのかもしれませんが。教会員は新しい牧師を前任者とどうしても比較しがちですが、大沼牧師の厳しさを伴った信徒訓練は、関谷前牧師に慣れ親しんでいた教会員には、まさに「実験的な牧会指導」と映ったのでしょう。更に教会員は、大沼牧師が主張する新しいものの見方、すなわち聖書的な視点と同時に社会科学的な視点を持つことの大切さということについて、大きな戸惑いを持ったことでしょう。しかし、天皇制軍国主義の中で強烈な体験をした大沼牧師にとって、このことは信仰的に極めて重要な事柄でした。社会の問題性をしっかり見抜く目を持つことなしに、「信仰、信仰」とばかり言って突き進むことの危うさを、戦前の日本の国家体制の中で骨身にしみて体験してきたからです。

教会員の間で直ぐには理解されなかったかもしれませんが、しかし教会のこれまでの歴史を振り返る時、大沼牧師の考え方は仙台教会の DNA として、私たちの中にもしっかり受け継がれていると言えるのではないのでしょうか。（文責：小林孝男）

- 
- 1 資料(1974/11/10\_献堂 20 年の歩み)
  - 2 資料(1995/03/26\_献堂十周年記念文集\_復刻版\_献堂四十周年誌に収納) 45 頁
  - 3 同上
  - 4 資料(2015/10/18\_60 年のあゆみ・抜粋) 1 頁
  - 5 週報(1984/11/11)、資料(1974/11/10\_献堂 20 年の歩み)、資料(1995/03/26\_献堂四十周年記念誌) 67 頁、資料(2015/10/18\_60 年のあゆみ) 1 頁、週報(2021/10/24)。1924/12/3 誕生、仙台教会牧師期間は 1957/4~1963/3。その後八幡教会の牧師に就任。2021/10/20 に召天、享年 96 歳。
  - 6 週報復刻版・福島(1957/06/02)
  - 7 週報(1984/11/11)
  - 8 『主の息吹の中で』 86 頁
  - 9 同上
  - 10 同上
  - 11 週報(1984/11/11)
  - 12 資料(2015/10/18\_60 年のあゆみ・抜粋) 1 頁、戦時疎開で宮城学院に在籍
  - 13 資料(1995/03/26\_献堂十周年記念文集\_復刻版\_献堂四十周年誌に収納) 45 頁
  - 14 同上 58 頁
  - 15 『ワース・C・グラント師の日本観』 174~175 頁
  - 16 資料(1995/03/26\_献堂十周年記念文集\_復刻版\_献堂四十周年誌に収納) 46 頁
  - 17 資料(1995/03/26\_献堂四十周年記念誌) 7 頁



大沼上牧師(前列左から二人目)